

# 歴史学習における博物館活用の方法

千葉県酒々井町教育委員会 指導主事 一場 郁夫

社会科においては、児童生徒が主体的に問題解決的な学習を展開できるようにすることが大切である。特に歴史学習においては、教科書の平面的な記述だけでは、認識は深まらない。そのための手立てとして、新学習指導要領【社会科】第3指導計画の作成と内容の取扱い1―(2)では、「博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。」と示されている。

このような学校と博物館との連携（博学連携）の必要性は、学校や博物館でも意識されるようにはなった。しかし、行政的な指導により、一時盛んになった連携論も、基礎基本の充実と社会科及び総合的な学習の授業時数の削減に伴い、下火になっていくという感否めない。そこで、今後の博物館活用のあり方について考えたい。

## ■博物館学習の可能性

① 実感の持てる歴史学習  
博物館学習は、自分たちの地域に中央政権との教科書の物語的な中央史から、歴史を身近に感じる地方史へと学習を展開することができる。また、実物資料を通して、歴史に対して臨場感を伴った当事者意識に基づく学習ができる。

## ② 歴史認識の育成

博物館の展示資料を通して、現代からの時間的経過（時間意識）及び、展示資料相互の関係から道具（モノ）の移り変わり（変遷意識）や他のモノとの関わり合い（因果意識）について考えることで歴史認識を育てることができる。

## ③ 情報活用能力の育成

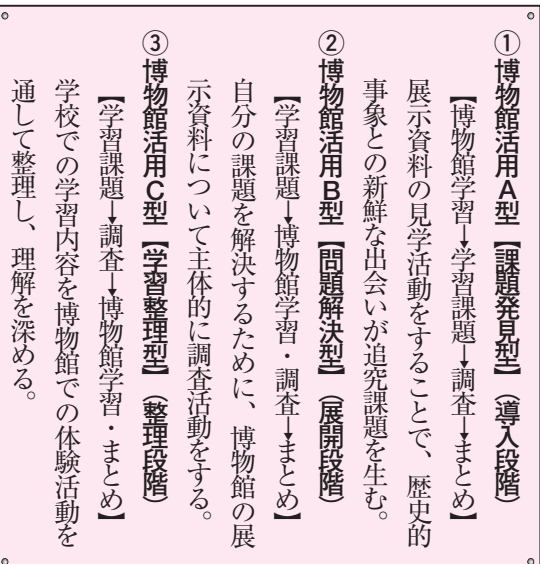
博物館の多様な情報源（展示資料・解説資料・図書資料・映像資料等）から必要な情報を選択、活用することを通して情報活用能力が育成される。つまり、博物館学習を展開することで、社会科学習として大切な要素であるこれらの学習効果が期待できるのである。

## ■博物館活用の方法

博物館では、学習のねらいに応じて次のような多様な活用方法で学習することができる。

- ① 博物館を見学して授業をする。
- ② 博物館の資料を借りて授業をする。
- ③ 博物館に移動博物館を依頼する。
- ④ 博物館に出前授業を依頼する。
- ⑤ 博物館のホームページを活用する。
- ⑥ 博物館に電話やメール等で質問する。

そして博物館見学の授業をする場合、学習内容に応じて博物館の学習過程の位置づけが変わる。



## ■博物館学習の認識段階（レベル）

博物館をただ見学しているだけでは学習内容は深まらない。児童生徒の反応を、「ふーん」から「なるほど」。そして、「そうか!」という認識に深める必要がある。

第1段階「ふーん」展示資料を見て、感心する。そして、関心を持って解説等を見ることで、

第2段階「なるほど」展示資料に対しての知識を持つ。そして、歴史的思考力を働かせて、

第3段階「そうか!」展示資料の知識を自分の持つ既習事項と関係つけて認識し、理解する。

つまり、博物館学習においては、この「そうか!」の認識に至るための手立てが必要なのである。

## ■博物館学習との出会い

私の博物館活用研究の原点は、社会科の教材開発で出会った勤務校近くの史跡である。それは、千葉県北部の印旛郡栄町にある東日本最大の方墳「石塚古墳」と古代寺院の「龍角寺」である。



▶出前授業



▶移動博物館



▶龍角寺



▶博物館での調査活動



▶発掘体験活動

しかし、当時、現地を訪れても大きな山(古墳)と礎石が残る古びた寺というイメージしか湧かず、まさに「ふーん」という言葉しか出てこなかった。そこで、この地域素材を教材化するために訪ねたのが、梶原房総風土記の丘(現・房総のむら)であった。

学芸員の方に6学年の歴史学習の内容を説明し、展示室で展示資料と史跡の解説を受けた。そこで、ようやく知識を得て、「なるほど」という認識を持った。さらに、方墳が、蘇我氏系豪族の古墳のシンボリックな形であること。龍角寺が、その豪族の山田寺(奈良県)と同じ瓦の紋様であることから、中央政権と地方豪族とのつながり(因果関係)を知った。また、古墳から古代寺院への権力の象徴の変遷を知ること、「そうか!」という知的理解に至った。

郷土史家からは、二つの史跡にまつわる伝説を聞き、歴史の中での民衆と史跡との関わりを知ることができ、その上で、教材化を図った。

■**実感を持たせる教材化のポイント**

①**歴史的データ(数値等)の提示による実感**

・**岩屋古墳**(一辺80m・高さ12.4mの方墳・土の量は約13400m<sup>3</sup>で5トトラック2700台分・一日100人が働いたとして280日かかる。)

・**龍角寺**(33mの三重塔・薬師如来座像・瓦

数値の提示により、大きさや造るための労力について実感を持ち、知的好奇心が喚起される。

②**中央史と地方史との関わりの実感**

教科書に記載されている中央史が自分たちの住む地域の歴史にも関わりがあることを知ること、知的探究心が喚起される。

③**伝説の導入(史跡と人との関わりの実感)**

岩屋古墳(枕貸し伝説)及び龍角寺(龍神伝説)の二つの伝説の内容の真偽はともかくとして、史跡の存在に意味を持たせ、史跡が民衆に支えられてきたということは、歴史的事実である。

■**実践事例(博物館活用B型)「龍角寺」**

①**既習事項(岩屋古墳)の確認**

豪族が大きな力(技術力・武力)を利用して労働力(農民)を使い、大きな古墳を造ることで力を周囲に示そうとした。

②**「龍角寺」に関する歴史的対象や水にまつわる伝説(龍神伝説)を知り、学習計画を立てる。**

**学習問題** 「龍角寺はだれが何のために建てたの

だろうか?」

**予想** だれが?「豪族」

何のために?

・力を示すため(古墳からの変遷から)

・水に困らないようにするため(水の伝説から)

・仏教を広めるため(中央政権の動きから)

③**同じ予想グループで博物館の調査活動を行う。**

(博物館では自分の予想に関する証拠を探すと

いう観点で、主体的な学習が展開される。)

④**グループで調査内容を整理し、発表し合う。**

⑤**発表内容に基づいて話し合い、まとめをする。**

■**児童の変容(博物館学習の効果)**

①**博物館への関心の高まり(意識調査)**

好きな調べ学習で、博物館を選択した児童

は、36%から学習後には61%に向上した。

②**中央史とのつながりの認識(児童の作文)**

・地域の豪族が中央の動きに合わせて動いていることがわかり、地域と教科書の歴史とはつ

ながりがあることがわかりました。

③**地域住民としての意識化(児童の作文)**

・たった一つ勉強しただけなのに、もつ古くからここにいたみたいで地域のことを実感をもって考えられるようになりました。私は地域の一員なんだと強く感じました。

④**町の史跡に対する誇り(児童の作文)**

・地域にこんな素晴らしい物があると知りませんでした。ぼくはいつまでも龍角寺を誇りに思っ

■**博学連携から博学融合へ**

博物館の学芸員は、研究者として情報発信する責務があり、学校の教員は、教育者として子どもを育てるといふ使命がある。その両者の熱意が生かされ、「ギブ&テイク」の関係が成立して連携の基礎が築かれる。その成果が、前述の児童の作文にも表れているといえよう。生涯学習社会に対応した公民的資質の基礎を養う教育のためには、学校教育と社会教育とが、相互の教育機能を融合させて活動することが大切なのである。

酒々井町では、キャリア教育の一環としての職場体験で、社会教育課と連携して発掘体験活動を行っている。実際の発掘現場で遺跡の説明を受けた後、遺物の発掘作業を行う。子どもたちにとって地道な作業を通して、一人一人の職業観や勤労観を育てることがねらいであるが、同時に、遺跡に直接ふれる活動を通して、実感を伴った歴史学習を行うことができる。

これからの教育は、子どもたちに、「社会の中で生きる力を育てる」という大きなねらいのもとに、明日の社会を築いていく、子どもを主体にした博学融合の教育が求められているのである。